20

『郷薬集成方』から『東医宝鑑』にみられる朝鮮半島医学の変遷

――本草を中心として――

朴　智　世

平安堂薬局

【目的】朝鮮半島医学は中国医学の影響を大きく受けながらも，固有の医学が形成された．それが大きく発展したとされるのは李氏朝鮮時代（1392–1910）である．この時代の代表的な医学書に，『郷薬集成方』と『東医宝鑑』がある．本研究では，主に両書の本草部分の内容を通して，朝鮮半島医学の形成過程を探る．

【方法】①『郷薬集成方』，『東医宝鑑』の本草部分における条文の構成について比較検討し，それらの特徴を考察した．②『郷薬集成方』，『東医宝鑑』の収載されている生薬の種類について比較検討し，それらの特徴を考察した．

【結果】

①『郷薬集成方』，『東医宝鑑』の本草部分は共に条文の大部分を，『証類本草』等の中国の本草書からの引用で構成している．しかし，その引用方法は各々異なっている．『郷薬集成方』では『証類本草』等の条文をそのまま引用して，載せているものが多い．（一部，中国の具体的な採集可能な地域名は省かれている等，の編集のあとは見られる．）一方で『東医宝鑑』では『証類本草』等の条文から一部を抜粋して整理している．さらに「朝鮮での採集地域，俗名（朝鮮半島での呼称）」等を内容とする，「俗方」を付している生薬もある．この「俗方」の内容は『郷薬集成方』に見られない事から，編著者である許俊のオリジナルの内容であると考えられる．（収載されている生薬の中には「俗方」の条文のみの内容となっているものもあり，これは朝鮮半島固有の生薬であると思われる．）『東医宝鑑』の17年前に中国で編算された本草書『本草綱目』が，それまでの本草書を著者の考えに基づき整理し，また自らの考え方を付している点から考えると，朝鮮半島でも同時期に『本草綱目』同様に新しい発想で構成された本草書が誕生したと見ることが出来るかもしれない．条文の構成という点で比較すると，『郷薬集成方』より『東医宝鑑』の方がより，朝鮮半島医学者である編著者のオリジナリティがより反映されていると言える．

②『郷薬集成方』では朝鮮半島で採集出来る生薬を「郷薬」と呼び，この「郷薬」のみに限定して収載している．一方，『東医宝鑑』では「郷薬」だけでなく，朝鮮半島で採集できないため中国から輸入する生薬，つまり「唐薬」も収載している．（「唐薬」に該当する生薬の条文の上には「唐」の文字が記されている）ただし，「俗方」の内容が「朝鮮での採集地域，俗名」等であることから，「郷薬」を積極的に用いようとする姿勢もうかがう事ができる．

以上①②より，『郷薬集成方』は自国で採集できる「郷薬」のみを用いて医学を行う事を最も重要視し，編纂された医学書であると考えられる．自国でまかなえる生薬のみを用いた医学を行うという意味で中国から自立し，朝鮮半島固有の医学を発展させようとした背景が伺える．

『郷薬集成方』の約200年後に編纂された『東医宝鑑』では「郷薬」を重要視しつつも，「唐薬」も用いた実用的な医学を目指し，その内容は編著者である許俊の見識に基づいて，過去の本草書・医学書を整理しなおした書と言える．また「俗方」という朝鮮半島医学者独自の内容を充実させることで，朝鮮半島の医学者が使いやすいものになり，朝鮮半島医学の発展に寄与したとも言えるだろう．

【引用文献】(1) 兪孝通．郷薬集成方．1433　(2) 許浚．東医宝鑑．1613　(3) 唐慎微．重修政和経史証類備用本草．1249　(4) 李時珍．本草綱目．1596